

おわりに

「Aさん、ここでのポイントは、足を広げることです。」Bさんのアドバイスにメモを取るAさん。高等部作業学習窯業班での一コマである。この「メモを取る」行動は、他の授業時間にメモを取る、登校後1日の日程を黒板から書き写す、現場実習で1日の日程を支援員に聞きながらメモを取るなど、学校生活だけではなく、日常生活でも生かされている。本研究が目指す「学び」がつながり、ひろがって、「学び」が連続する事例である。

今回の特別支援学校学習指導要領の知的障害教育に関する事項の中で、「個々の児童生徒の実態に即して、生活に結び付いた効果的な指導を行うとともに、児童生徒が見通しをもって、意欲的に学習活動に取り組むことができるよう配慮するものとする。」ことが示された。「生活に結び付いた効果的な指導を行う」ためには、児童生徒一人一人に応じた指導目標や指導内容を設定し、日々の生活に結び付いた学習として展開されるような継続的な取組が必要である。また、「児童生徒が見通しをもって、意欲的に学習活動に取り組む」ためには、児童生徒自身が何をすればよいかを分かり、自分から学習活動に取り組むことが大切である。

このことを本校での今回の研究に照らし合わせてみると、「生活に結び付いた効果的な指導を行う」ためには、研究内容の視点2で示した「授業実践と活用場面での実践とを関連付ける取組」（ひろがりの視点）が必要であり、「児童生徒が見通しをもって、意欲的に学習活動に取り組む」ためには、「子どもが「学び」の主体となるための学習活動や指導方法及び次の授業へつなげるための工夫」（つながりの視点）が必要である。学んだことを習得・活用することによって、生活に結び付くのであり、1単位時間の授業が次の授業につながってこそ、児童生徒は見通しをもって、意欲的に学習活動に取り組むことができるようになるのである。

本校では、「授業づくり」を研究主題に、今回を含め3回連続して研究を行ってきた。前々回の研究では、「自分のよさや持てる力を発揮する子どもを目指した授業づくり」を主題に、様々な支援者との連携・協働作業の下、学習環境の整備や教師の働き掛けの工夫の実効性について研究を行った。前回の研究では、「確かな学びにつながるための評価の在り方」に焦点を当てて、授業実践における子どもの学び方や変容を具体的にとらえるための評価の在り方や生かし方を研究した。今回は、教師の働き掛けや評価、教材・教具とともに、子どもの「学び」、子ども自身の感じ方、思いにも焦点を当て、授業づくりについての研究を行ってきた。授業づくりについては、この2年間で確実に向上し、子どもの姿も変容してきているが、子どもの「学び」の連続する授業実践となっているかどうかについては、まだまだ多くの課題があると考えている。多くの方々から忌憚のない御批判、御教示等を賜りたい。

最後に、今回の研究に際し御後援をいただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、また、研究推進のために指導・助言のお立場で懇切に御指導くださった堂免良久先生（鹿児島県教育庁義務教育課主任指導主事兼係長）、前園孝哉先生（鹿児島県教育庁義務教育課指導主事）、中村良一先生（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課課長）福田孝志先生（鹿児島県立鹿児島養護学校長）にお礼申し上げます。また、共同研究者のお立場で日常的に御支援くださった鹿児島大学教育学部障害児教育学科教授 内田芳夫先生、准教授 雲井未歆先生、准教授 片岡美華先生に深く感謝の意を表します。

平成23年2月4日

副校長 古賀政文

研究同人

【校長】新名主健一 【副校長】古賀 政文 【教 頭】奥 政治

【小学部】水野 高明	【中学部】萩之内 靖	【高等部】小山 浩平
新條 嘉一	松岡 仁志	加治木 守
☆川添 直人	上温湯 晋	末廣 剛志
小野祐貴子	黒木 里香	☆有田 成志
☆白玉 暢之	☆山之口和孝	中村 麻子
内倉 広大	四元 明美	☆福元 康弘
柳元香菜美	☆宮内 文久	笹河 博幸
野間口裕子	野中 啓子	鶴田 智美
	松坂 彩美	☆塩屋 千鶴
	長野さおり	

☆：研究部員

【養護教諭】 藤迫美由紀

【育児休業中】 初村多津子

【共同研究者】 鹿児島大学教育学部
障害児教育学科

教授 内田 芳夫

准教授 雲井 未歆

准教授 片岡 美華

【 転 出 】 高尾 政代 亀田 純 白石 聡子 上仮屋祐介

研究紀要 第18集

発行 平成23年2月

発行所 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校

〒890-0005 鹿児島市下伊敷一丁目10番1号 TEL 099-224-6257

印刷所 有限会社アト印刷

〒890-0861 鹿児島市東坂元二丁目29番1号 TEL 099-247-1605
